

大学を拠点とした共に生きる地域社会の構築

——ボランティア実践教育の在り方について——

目 黒 達 哉

はじめに

現代社会は、いじめ、不登校、うつ病、自殺といった心の問題が増加傾向にある。少年犯罪、凶悪犯罪も後を絶たない。戦後の日本教育は、高度経済成長に貢献し、日本を先進国に発展させ、物質的に豊かにした。その反面、人として大切な何かを置き去りにしてきてしまったのではないかと思われる。それは、夢、生きる、気持ち、援助、協力、人を思いやる気持ち、人への優しさ、自律といった言葉にすると簡素なものだと考える。筆者はこれを精神力と表現している。日本は精神力が低下しているように感じる。

戦後の教育は、偏差値教育と言われ、人間を数量化し、序列化してきた。筆者の偏った見方かもしれないが、その結果、自分本位で、「指示待ち人間」といわれるように受け身的で、自由に物事を考え自ら進んで行動することが苦手な若者が多くなったように感じている。筆者は何にも戦後の教育を否定しているのではない。筆者も高等教育に従事してきた者として謙虚に現状を受け止め、教育改革を推進して必要があると考えている。

筆者は、現在の日本社会において、精神力と実践力を高めていくことが重要な課題ではないかと考えている。筆者は、その解決方法のひとつにボランティア実践教育があると考えている。

現在、日本において、ボランティア実践は活発化している。しかし、ボ

ランティアとは、本来、自発性、無償性を重んじているはずであるが、「やらされた」、「やってやった」と被害感を持つ者がいる。有償ボランティア、ボランティア・アルバイトという言葉に代表されるように無償性と矛盾している。筆者は、ボランティア実践教育の内容の充実とは、自己の生き方の反映として捉える事が出来るかということにかかっていると考える。筆者はボランティアをしたから善とするのではなく、実践体験そのものがボランティア自身にとってどのような学びとなったのかといった実践体験の振り返り（フォローアップ）が明確になされていないと感じている。つまり、筆者は実践体験の深まりが大切であると考えている。

ボランティアの中には、実践体験を通じて、戸惑い、迷い、悩みなど葛藤する者もいる。自ら志願したはずのボランティアであるが、否定的な気持ちになることもある。筆者の経験からいって、このようなボランティアのフォローをしっかりと実施している組織、団体は数少ないように見受けられる。乱暴な言い方であるが「やりっぱなし」である。実は、葛藤した体験や否定的な体験の中に、重要な要素が隠されていることが多々ある。それを明確にすることによって、ボランティア自身が達成感や内的な充実感を味わい、継続性の意欲がわいてくる。つまり、打たれ強い、粘り強い、辛抱強いといった自己コントロールできる自律した人間が育っていくことになる。現代の若者には、この点が欠けてしまっているように感じられる。

筆者は社会福祉学部 に所属している。学生は、卒業後、福祉の現場で活躍する。現在、福祉の現場では、被虐待児、高齢者の認知症の問題などで施設職員の中に対人援助困難感を感じ、燃え尽き症候群に陥る者もいる。筆者の知っている高齢者施設では、年間の離職率が約 60% というところもある。このような状況では、職員が定着しない。施設内においては、職員が利用者（児童、障害者、高齢者など）を虐待するという問題が生じている。本来、支援者であるはずの職員が加害者と化してしまうことも生じている。夢や希望を持って飛び込んだはずの現場であるが、それをいつの間にか見失ってしまったのであろう。職員は、利用者との関係、職場の人

間関係、あるいは組織の在り方などで戸惑い、迷い、悩み、葛藤する。しかし、それを自分自身の中でうまく昇華できないがためにうつ症状を呈し燃え尽きるか、利用者を虐待するといった行為に出してしまうと考えられる。

福祉職は、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士など福祉のプロフェッショナルとして収入を得るわけであるが、ボランティア的な要素も多々含んでおり、仕事として割り切れないところがある。ここに矛盾が生じる。この矛盾を福祉職自身の中でうまく線引きできないでいると自分の位置を見失い葛藤する。

このような社会的背景の中で、ボランティア実践教育は、その内容を充実させ、打たれ強い、根気強い、辛抱強いといった自律した人間を育成し、精神力と実践力を兼ね備えた人材育成に貢献することが可能であると考えられる。

II 研究目的

本論文では、「はじめに」のところで述べたような観点に立脚して、ここでは特に社会福祉学部 に所属する学生をボランティア実践教育から社会福祉専門職として実践力と精神力を高めるために、大学近隣の協働連携機関と共に実施したボランティア実践事例から

1. 協働連携機関と社会貢献するメカニズムについて学ぶ、
2. ボランティア実践体験における学生の気づきをいかに掘り、いかに深めるか、
3. ボランティア実践体験における学生の戸惑い、迷い、悩みなどの葛藤をどのように処理し、昇華させていくか、

について考察する。

Ⅲ 大学生のボランティア実践教育の目的と成果に関する具体的な目標について

筆者は、大学生のボランティア実践教育の目的と成果に関する具体的な目標について、次のように考えている。

1. 学生のボランティア実践教育の目的

対象者（利用者）ことを第一に考え行動し、

- 1) 社会貢献することにある。
- 2) 外部機関との協働・連携の在り方を学ぶ。
- 3) 学生自身が行き組みの中での人間関係（対象者との関係、教員との関係、学生同士の関係など）やその他の出来事によって生じる戸惑い、迷い、悩みなどの葛藤を自らコントロールできるようにすること（自律）を目指す。

2. 成果に関する具体的な目標

- 1) ボランティア体験活動を行う動機・目的を明確にする。
- 2) ボランティア体験活動を行ううえでのヴィジョンを明確にする（学生自身はやり終えた時にどんな気持ちでいたいのか）。
- 3) 自分自身の得手、不得手を発見する。
- 4) 実践の中で戸惑い、迷い、悩み等の葛藤が生じた場合にはそれを明確にする。それを昇華できるように精神力を高める。
- 5) 実践自体と学生自身における課題点、問題点を見つめ、分析できるように問題解決能力を高め、次へのステップとしてつなげていける実践力を身につける。
- 6) 自分自身に関する気づきを深める。
- 7) 総合的に目的、ヴィジョンは達成できたか否か明確にする。

3. 大学の人材養成目的との関連性について

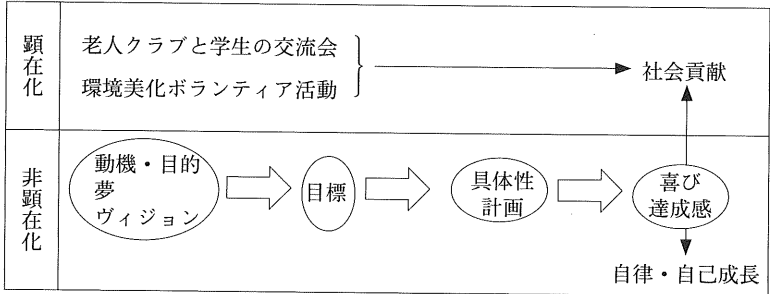
筆者が所属している社会福祉学部社会福祉学科の人材養成目的は、学則に以下のように記述されている。「豊かな教養を培って人間と社会に関する真理を探究し、社会福祉及び関連分野に関する専門的知識と技能を修得して、共に生きがいのある社会の実現に寄与する人間を養成すること」とある。先述したようにボランティア実践教育の目的は、社会貢献、協働・連携、自己コントロール（自律）に3つを挙げている。学則と比較してみると、「豊かな人間を培って人間と社会に関する真理を探究し」の記述は目的の「自律」に関連し、また「共に生きがいのある社会に実現に寄与する人間」の記述は、目的の「社会貢献」、「協働・連携」に関係し、相互に関連していると考えられる。

IV ボランティア実践教育をバックアップする理論

実践活動をバックアップする理論は、筆者らが提唱している実際の行動学である。ボランティア実践教育はこの理論に基づいて実施する。

実際の行動学とは「人が実際に行動に起こそうとする行為の動機や目的を明確にし、それを具体化し行為する。実際的な行為の結果が社会貢献や自分自身の夢（ヴィジョン）、喜び、達成感につながることを体験し、それに気づく、実践学である〔実際の行動学Ⅰ〕（図1参照）。さらには、人が実際に行為を起こすと戸惑い、迷い、悩みといった内的な葛藤を体験する。特に対人関係が存在する場合に生じる。体験者が行為から生じた葛藤を処理し、それを昇華することによって、体験者自身が自律・自己成長へと向かっていくことを学ぶ実践学でもある〔実際の行動学Ⅱ－1、Ⅱ－2〕（図2、図3参照）。基本的には、「事前学習」⇒「準備」⇒「実践体験（本体）」⇒「事後学習（フォローアップ）」の一連の実践過程〔実際の行動学Ⅲ〕（図4参照）に沿って展開される。」

ここで、実際の行動学Ⅲ（図4）についてはさらに詳細を述べることにする。



(ヴォランティア実践研究会資料、1997 目黒改変、2008)

図1 実際の行動学 概念図Ⅰ

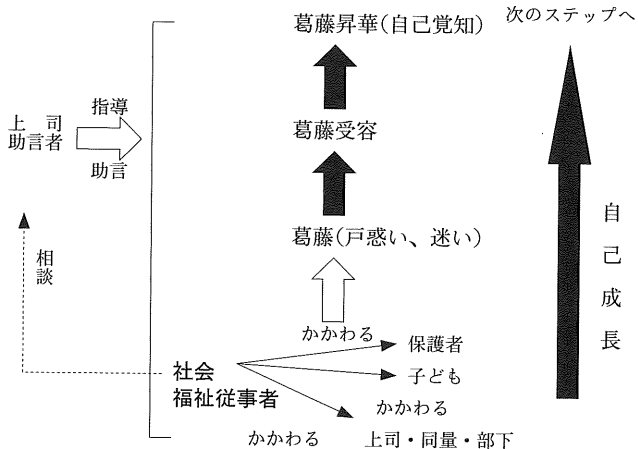
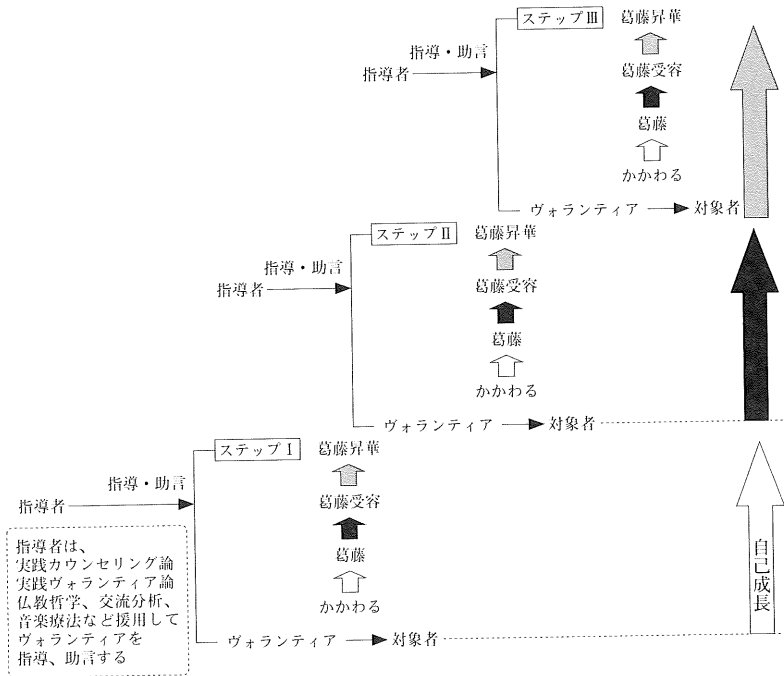


図2 実際の行動学 概念図Ⅱ-1 (葛藤昇華と自律・自己成長)

※図の中の「上司・助言者」→担当教員、「社会福祉従事者」→学生、「上司・同僚・部下」→外部関係機関の担当者、学生同士と置き換えて考えてみることもできる (目黒、2007)

大学を拠点とした共に生きる地域社会の構築



(出典：目黒達哉・竹田倫代『福祉教育の論理性について』愛知新城大谷大研究紀要第3号、2006、p51-p67)

図3 実際の行動学 概念図Ⅱ-2 (葛藤昇華と自律・自己成長への段階図)

1. 事前学習

- 1) ボランティア論の講義
- 2) 動機・目的を明確にする

実践活動を通じて学生自身がどうなっていたいのかを描く（ヴィジョン）。通常、目標と具体的な計画を作成すれば、物事はうまくいくと思いがちだが、誰のために、何のためにするのか、そのことを成し遂げるのは何の意味合いがあるのかということをお忘れがちになる。そうすると目的や目標が脇道に逸れてしまう。そうならないためにも、学生に徹底して動機・目的を明確にするように指導する。

事前学習	準備	本番 (体験活動)	事後学習 (フォローアップ)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 動機 ・ 目的は何か ・ ヴィジョンは何か。 ・ 対象者は誰か ・ ボランティアについて学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 取組の目標を設定する ・ プログラムの内容を話し合い、決定する ・ 連携機関の代表者と内容について話し合い、最終的に決定する。 ・ 必要備品の準備をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対象者のことを第一に考え行動する。 ・ ボランティア同士が協力 ・ 連携する。 ・ 全体を見渡すことに心がける 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実践の振り返り ・ 自分自身の得手、不得手を発見する ・ 葛藤を昇華する ・ プログラムの問題点、課題点を把握、分析し、次へ繋げていけるようにする。 ・ 動機 ・ 目的は達成できたか

(出典：図3に同じ)

図4 実際の行動学 概念図Ⅲ (ボランティア教育の実践過程)

3) 外部講師による講義。

2. 事前準備

1) 実践に向けての会議

学生のリーダー1名、サブリーダー1名を決め、実践活動のテーマ、目標の設定。他の学生の役割分担。

2) 対象者のことを第一に考える

活動の具体的な内容を学生同士で話し合う。

3) 外部機関との協働・連携

外部機関とかかわりがある場合は、関係機関・団体との打ち合わせ会をもつ。リーダー、サブリーダーが相手先へ出向き、学生が作成したプログラム案を提示し、意見をもらい、それを大学へ持ち帰り、学生で最終の完成プログラムを作成する。

3. 本番（実践活動本体）

対象者のことを第1に考え行動する。

4. 事後学習（フォローアップ）

学生ミーティングにおいて、以下のようなエクササイズについて、学生同士が分かち合う。実践活動の意義を深めるために、外部講師にも指導・助言をもらう。

1) 実践の振り返り

ただ反省するのではなく、前向きな話し合いをする。

2) 自分自身の得手、不得手を見つめる

3) 葛藤したことを明確にし、昇華する

4) プログラムの問題点を分析し、次への課題点を発見する

5) 自分自身の動機・目的・ビジョンは達成できたか否かを明確にする。

V 具体的な実践事例

具体的な実践事例は、大学近隣の公園における環境美化ボランティア活動である。大学近隣の保育園の園児と学生が公園を管理する土木事務所の協力を得て、公園の環境美化ボランティア活動に取り組んだ。

協働連携機関と各機関の目的は、以下のようであった。

1. N市立A保育園（園児 21 名、保育士 7 名）

この活動における保育園の目的は、将来、園児が環境美化に関心を持てる人になってほしいという教育的効果を図ることにあった。

2. N市N土木事務所（緑地係職員 7 名）

この活動における土木事務所の目的は、愛護活動である。愛護活動とは、土木事務所の事業目的のひとつで、地域住民が公共の物を大切にすることを高めるというものである。

3. 本学社会福祉学部3年生（ゼミ生10名）

本学学生の目的は、実践力と精神力を高めるということである。

これらの3者の協働機関の目的が相まって、今回の実践活動の場が成立したのであった。

VI 研究方法

本実践研究は、前述したように、実際の行動学Ⅰ（図1）、実際の行動学Ⅱ-1（図2）、実際の行動学Ⅱ-2（図3）、実際の行動学Ⅲ（図4）に基づいて実施した。

1. 研究対象：本学3年生ゼミ生10名

2. 研究手続き

1) 事前、事後アンケート用紙の作成

2) 2009年11月中旬事前アンケート実施

実践本番（園児との公園における環境美化ボランティア活動）前に事前アンケート用紙（5項目の質問）を用意し、実施した。尚、質問項目は自由記述のものと、4件法（①ある、②まあまあある、③あまりない、④ない）によるものと2通りであった。質問項目は次のようであった。

①環境美化ボランティア活動（園児と公園のベンチをきれいにする）

のあなたの動機・目的は何か。

②実施するにあたって、戸惑い、心配、疑問などの葛藤はあるか。

③「②。」で「①ある」、「②まあまあある」と答えた方、それはどんなことか。

④この活動であなたは何が得られると思うか。

⑤この活動であなたはどうなっていたいか。

3) 2009年11月25日実践活動終了後、事後アンケート実施

実践本番（園児との公園における環境美化ボランティア活動）終了後に事後アンケート用紙（10項目の質問）を用意し、実施した。尚、質問項目は自由記述のもの、4件法〔（①ある、②まあまあある、③あまりない、④ない）など〕、3件法（①見出せた、②どちらともいえない、③見出せなかった）によるものがあった。質問項目は次のようであった。

1. 環境美化ボランティア活動（園児とベンチをきれいにする）のあなたの動機・目的は何だったか。
2. 準備から振り返って、今はどんな気持ちか。
2-2「2.」について、それはどうしてか。
3. 自分自身に関して、気づいたこと、発見したこと。
4. 得意なこと、不得意なことを見出せたか？
4-2「①見出せた」と答えた方は、具体的に。
5. 内面で葛藤したこと（戸惑い、迷い、悩み、疑問など）
5-2「5.」で「①ある」、「②まあまあある」と答えた方、それはどんなことか。
6. 園児との環境美化ボランティア活動を実践してみて、良かった点、改善点は。
7. 外部機関との連携から（保育園、土木事務所）から学んだこと、感じたこと。
8. 実践してみて、あなたは何が得られたか？
9. 動機・目的は達成できたと思うか。
9-2「9.」の質問の答えについて、それはどうしてだと思うか。
10. この実践活動の今後の展開についてあなたの考え（アイディア）は。

4) 2009年12月2日ゼミの時間時に事前・事後アンケートに基づいて、事後学習（フォローアップ）を実施し、体験の定着化を図った。

3. 結果の処理

事前、事後アンケートの結果を表に整理した。また、フォローアップにおける学生と教員のやり取りを記録したものを整理した。

VII 実践の経過

ここでは、事前学習・準備、実践活動、事後学習という一連の具体的な実践経過について述べることにする。学生は、5月、6月、7月、10月の週1回のゼミの時間およびゼミ時間外に自主的に活動を実施した。

1. 事前学習・準備

1) リーダー1名、サブリーダー2名を決定した。

2) 環境美化ボランティア活動の場所の選定

リーダー、サブリーダーを中心に話し合い、大学近隣のI公園内のベンチの美化に決定した。

3) ヴィジョン・目的の決定

リーダー1名、サブリーダー2名を中心にヴィジョン・目的を話し合った。

①ヴィジョン：「ここに来たい」「また来たい」と思える公園にしよう。

②目的：A保育園の園児と共に、楽しくI公園のベンチをきれいにする。

4) 外部講師による講義

学生は、N土木事務所の緑地係職員による土木事務所の仕事内容、愛護活動について、またヴォランティア実践研究会⁽¹⁾の研究員によるボランティアとは何かについて講義を受け、ボランティア実践を展開していく上で大きな学びとなった。

5) ボランティア活動の内容の決定

まず、事前に学生でI公園のベンチの下塗りをし、本番（実践）では学生がダンボールで動物の型を作り、園児が型内を塗り、そこに動物の

絵を描いてもらう。

6) 事前アンケートの実施

実践（園児との公園での環境ボランティア美化活動）前に実施した。

2. 実践活動

1) 2009年11月5日、12日（午前9時00分から午後12時10分まで）
学生のみでI公園のベンチの下塗りをする。

2) 2009年11月19日（午前10時40分から午前11時まで）
A保育園において、園児への説明会を実施する。

3) 実践本番 2009年11月26日（午前10時から午前11時40分まで）
N土木事務所の協力を得て園児と共にI公園の環境美化ボランティア
活動を実施する（I公園のベンチに絵を描き、きれいにする）。

3. 事後学習 [フォローアップ (実践の振り返り)]

実践体験の定着化を図るため、事後学習を実施した。

1) 事後アンケート用紙の記入

実践本番終了直後に、学生に事前アンケート用紙を配布し、記入してもらった（学生個人での振り返り）。

2) ゼミの時間におけるフォローアップ

筆者は、フォローアップ前に予め学生から回収した事前・事後アンケートに目を通した。実践本番終了後初めてのゼミの時間において、特に「学生の気づきを深める」、「戸惑い、迷い、悩み、疑問などの葛藤」の2つに焦点を当て、学生一人ひとりに発表してもらった。また、筆者が事前、事後アンケートに基づいて学生一人ひとりに指導、助言をした。

VII 実践の結果

ここでは、事前・事後アンケートの結果、ゼミの時間おけるフォローアップの記録（学生の発表、筆者の指導・助言）について提示することにする。

1. 事前・事後アンケートの結果

ゼミ生は10名であるが、8名の事前・事後アンケート用紙を回収できた。事情により2名分の事前・事後のアンケート用紙は回収できなかった。

アンケートのデータは8名と少数なため、特に統計処理を実施していない。事前アンケートの結果は表1に、事後アンケートの結果は表2-1から表2-3までのようである。

1) 事前アンケートの結果について

表1から質問1の「動機・目的」については、「子どもたちと楽しく」「子どもに楽しんでもらう」「子どもたちとふれあう」など子どもとのかかわりに関する記述が多くみられる。質問2の「葛藤はあるか？」については「①ある」もしくは「②まあまあある」と回答したものは8名中6名とほとんどの学生が事前に葛藤を感じていることが分かる。質問3において、葛藤の具体的な記述を見ると「子どもとのかかわりに関する記述」「うまくいくのか、時間はあるかなどの実際の記述」「事前準備に関する記述」などさまざまである。

質問4「この活動で何が得られるか？」に対しては、「子どもや地域の人々とのかかわり・コミュニケーションに関する記述」、「友情、達成感、楽しむ、辛さ、一生懸命さなど気持ちに関する記述」などが散見された。一方で「わからない」が1名、無回答1名みられる。

最後の質問5「この活動でどうなっていたいか？」に関しては、「自信を持つ、楽しんでいた、人生の糧、すがすがしい気持ちなど精神的な記

大学を拠点とした共に生きる地域社会の構築

表1 事前アンケート

質問 学生	1. 環境美化ボランティア活動（園児と公園のベンチをきれいにする）のあなたの動機・目的は何か？	2. 戸惑い、心配、疑問など葛藤はあるか？	3. 「2.」で「①ある」、「②まあまあある」と答えた方、それはどんなことか？	4. この活動であなたは何か得られると思うか？	5. この活動であなたはどのようになっていたいか？
A(女)	・子どもたちと楽しく	③あまりない		・子どもとかかわる楽しさ	・子どもと楽しく遊べるようになっていたい
B(女)	・みんなで協力する	③あまりない		・人とかかわる楽しさ	・ゼミのメンバーと今より仲よくなっていたら
C(女)	・子どもたちに楽しんでもらう ・良いことをしたというスッキリした気持ちを感じてもらおう	①ある	・うまくいくのか本当に不安	・素直に物事を楽しむ気持ち ・達成感	・計画実行の苦勞、達成感を力に自信をもつ
D(女)	・ボランティアについて学ぶ ・子どもとかかわりを学ぶよい機会	②まあまあある	・段ボールの型紙で絵を描くことが、少し複雑なので、子どもたちがどこまで理解するか不安	・ボランティアの大切さや意義の再確認	・子どもたちの自由な発想を取り入れる ・見守れる人になりたい
E(女) サブリーダー	・子どもたちとふれあうこと	①ある	・子どもたちとうまく接することができるかどうか	・わからない	・楽しんでいたい
F(男) サブリーダー	・ベンチをきれいにする	①ある	・上手にできるか ・時間があるのか	・地域の人とのコミュニケーション	・積極的にボランティアに参加できる人
G(男) リーダー	・公園をきれいにする ・子どもたちに楽しんでもらう ・環境や物を大切にすることを養う ・仲間と協力する ・仲間と友好を深める ・仲間と親睦を深める	①ある	・土木事務所との打ち合わせで思うように進まなかった ・みんなをリードできるか不安 ・他のボランティアと比べると何倍もたいへん ・準備からかなりの時間を必要し、先が見えてこない	・みんなとの友情 ・何物にも代えられない友情 ・楽しさ、辛さ、一生懸命さなど味わう気持ち	・成功、失敗など人生の糧にできるように ・やり遂げたことに自信を持っていたい
H(男)	・園児と一緒にたくさん絵を描く	①ある	・時間内に描けるかどうか ・子どもが飽きずに行けるかどうか		・すがすがしい気持ち

目 黒 達 哉

表 2-1 事後アンケート

No.1

質問 学生	1. 環境美化ボランティア活動 (園児とベンチをきれいにする) の動機・目的は何だったか	2. 準備から振り返って今はど んな気持ちか?	2-2 「2.」について、それ はどうしてか?	3. 自分自身に関して、気づ いたこと、発見したこと
A (女)	・子どもたちと楽しく公園 の美化をする	②まあまあ満足	・目的が達成できたから	
B (女)	・また来なくなる公園を造 ること	①満足	・大きなトラブルもなくか わいいベンチにできた	
C (女)	・子どもたちに楽しんでも らう ・良いことをしたという気持 ちを感じて欲しい	①満足	・大成功といえるほどスッ キリした気持ち	・ネガティブな思考だと気 づいた
D (女)	・子どもたちとふれあうこと	①満足	・子どもたちが笑顔で最後 まで作業してくれたから	・自分は前に出るタイプで はなくバックアップの方 が合っている
E (女) サブ リーダー		②まあまあ満足	・準備から本番まで頑張れ たから	・人任せなどところがある
F (男) サブ リーダー	・皆にベンチ、公園をきれ いに使ってほしい	①満足	・上手にできホットしてい るから	
G (男) リーダー	・公園をきれいにする ・子どもたちに楽しんでも らう ・環境や物を大切にする心 を養う ・仲間と一つのことに向かっ て協力する ・仲間と友好を深める ・仲間と親睦を深める	②まあまあ満足	・みんなから「リーダーの おかげ」と評価していた が逆にみんながカ バーし、頑張ってくれた から	・自分は皆を引っ張って行 くタイプではない ・リーダーではなくサブリー ダーが向いている ・発表時、子どもたちに話 している自分が好き
H (男)	・みんなで全力で楽しめる ようになる	①満足	・とても楽しめた	

大学を拠点とした共に生きる地域社会の構築

表 2-2 事後アンケート

No.2

質問 学生	4. 得意なこと、不得意なことを見出せたか?	4-2. 「①見出せた」と答えた方は、具体的に書いてください	5. 内面で葛藤したこと(戸惑い、迷い、悩み、疑問)	5-2. 「5.」で「①ある」「②まあまあある」と答えた方、それはどのようなことですか?	6. 園児との環境美化ボランティア活動を実践してみて、良かった点、改善点
A (女)	②どちらともいえない		③あまりない		<良かった点> ・子どもが楽しそうだった <改善点> ・色の配分
B (女)	②どちらともいえない		③あまりない		<良かった点> ・子どもが楽しんできた ・自分も楽しめた
C (女)	①見出せた	<得意> ・子どもと遊ぶ <不得意> ・子どもをやる気にさせる	①ある	・土木事務所が積極的に子どもとかかわるので少し戸惑った	<良かった点> ・子どもたちが楽しそう ・土木事務所も満足そうだった <改善点> ・細筆を多く用意した方が子どもが使いやすい
D (女)	②どちらともいえない		①ある	・リーダーが頑張り、私には何ができるのか	<良かった点> ・子どもが考えて以上に絵を画してくれた <改善点> ・絵が乾くまで、やることのない園児がいた
E (女) サブリーダー	①見出せた	<不得意> ・まとめること。すべてにおいて	①ある	・子どもたちとどう接してよいのか	<良かった点> ・ゼミのみんなと仲良くなれた ・たくさんの子どもたちの笑顔が見れた
F (男) サブリーダー	②どちらともいえない		①ある	・本当に子どもたちとベンチをきれいにできるのか	<良かった点> ・スムーズにできた
G (男) リーダー	①見出せた	<得意> ・みんなの話をしっかり聞いてあげる ・誰とでも平等に接することができる <不得意> ・要領よくまとめること ・みんなを率いて物事を進めること ・一つの事に執着しすぎてしまうところ ・自分で抱えてしまい、指示が出せない	①ある	・土木事務所の担当者と根本的に合わなく戸惑った	<良かった点> ・思った以上に順調に進んだこと ・子どもたちの独特の発想に出会えたこと <改善点> ・土木の担当者の意見に左右されすぎた(自分の意見をもっとぶつけるべきだった)
H (男)	②どちらともいえない		③あまりない		<良かった点> ・みんなが協力してできた <改善点> ・もっと園児に自由に描かせてあげたかった

目 黒 達 哉

表 2-3 事後アンケート

No.3

質問 学生	7. 外部機関との連携 (保育園、土木事務所) から学んだこと、 感じたこと	8. 実践をしてみて、 あなたは何が得ら れたか?	9. 動機・目的 的は達成 できたと思 うか?	9-2. 「9.」の質問の 答えについて、そ れはどうしてだと 思うか?	10. この実践活動の 今後の展開につい てあなたの考え (アイデア)は?
A (女)		・人と関わることの 大切さ	②まあまあ できた	・楽しく公園を美化 できたから	
B (女)		・ボランティア活動の 大変さとやりがい	①できた	・何度も打ち合わせ をして、細かく計 画を立てたから	
C (女)	・土木は私たちのこと を大人ともみれ ず、子どもともみ れず ・土木の人は子ども たちには良いパパ だった	・成功への自信と達成 感	②まあまあ できた	・子どもはとても楽し そうで、私たち も、土木も満足し たから	・今後、あの公園を さらに良くする努 力が必要
D (女)	・それぞれの専門性 があってこそそのボ ランティア活動だっ た	・ボランティア活動 の大きさ、難しさ、 やりがい、楽しさ	②まあまあ できた	・子どもたちとたく さん関わることが できた ・ボランティアについ て学べたから	・子どもの発想をど んどん生かす
E (女) サブ リーダー	・話し合いの大切さ		②まあまあ できた	・雑用もして、子ど もとのふれあいは 完璧とは言えない	・仲間との連携が大 切だと思う
F (男) サブ リーダー	・もっと話し合いを した方が良かった		①できた	・きれいになり満足 している	・もっと早い時期か ら企画を考えたい
G (男) リーダー	・社会人の暖かさ、 人格、厳しさを体 感した ・社会に出るための 具体的なイメージ がつかめた	・「やっぱり子ども が好き」という思 いを得ることが出 来た	②まあまあ できた	・子どもたちに楽し んでもらえた ・環境や物を大切に する心を養うには 少しハードルが高 かった	・絵を描く活動だけ でなく、落ち葉を ほうきではいて回 収する
H (男)		・楽しくやることの 大切さを学んだ	②まあまあ できた		

述」が多く見られ、次に「子どもと楽しく遊べる、子どもの自由な発想を取り入れるなど子どもとのかかわりに関する記述」がみられる。さらには「見守れる人、積極的にボランティアに参加できる人など自己像に関する記述」も見られた。

2) 事後アンケートの結果について

表 2-1 の質問 2 「準備から振りかえてどんな気持ちか？」に関して、8 名全員が満足していると回答している。

ここでは、特に「自分自身に関する気づき」、「内面で葛藤したこと」、「外部機関との連携」の本研究目的に関する項目に焦点を当てて結果を記述する。

表 2-1 の質問 3 「自分自身に関する気づき、発見」の記述を見ると、「ネガティブな思考だと気づいた」、「自分は前に出るタイプではない」、「人任せなところがある」など自己否定的な記述が 5 件で、自己肯定的な記述は「発表時、子どもたちに話している自分が好き」の 1 件のみであった。

表 2-2 の質問 5 「内面で葛藤したこと」に関して 5 名の学生が「①ある」と回答しており、3 名の学生が「③あまりない」と回答していることが分かる。質問 5-2 で葛藤の具体的な内容の記述を見ると、「土木事務所の職員との人間関係や職員の姿勢に関する記述」、「子どもたちとのかかわりに関する記述」、「自分自身に関する記述」などが見られた。

表 2-2 の質問 7 「外部機関との連携から感じたこと、学んだこと」については、5 名の学生が記述している。具体的に記述内容を見てみると「話し合いの大切さに関する記述」が 2 件ある。また「協働・連携機関の専門性に関する記述」、「社会に出るための具体的なイメージに関する記述」、さらには「社会人の暖かさ、厳しさなど気持ちに関する記述」が見られた。

2. ゼミにおけるフォローアップの記録の経過

筆者から、冒頭において、本日の演習（ゼミ）は、環境美化ボランティア活動の振り返りをする。提出された事前・事後アンケートに基づいて、特に、事後アンケート調査の「3. 自分自身に関して、気づいたこと」、また「5. 内面で葛藤したこと（戸惑い、迷い、悩み、疑問など）」、「5-2

5. で①ある、②まあまああると答えた方、それはどんなことですか？」、さらには「7. 外部機関との連携（保育園、土木事務所）から学んだこと、感じたこと」に焦点を当て実施する旨を伝え、振り返りを開始した。

尚、下記の 内の記述はフォローアップ時の学生の様子および学生と筆者のやり取り、< >内の記述は筆者から見た学生の印象、【 】内の記述は筆者から学生に対する指導・助言を表す。

A（女）、B（女）、H（男）は、担当教員から質問しても特に反応はなく、「楽しかったです」、「良かったです」という応答であった。

<この3名はアンケートの記入状況を見ても、「気づき」や「葛藤」について無記入である。>

【担当者は、この3名に対して、よく頑張ったこと、より以上に積極的にかかわるよう助言した。】

C（女）は、アンケート用紙に「自分自身がネガティブな思考だと気づいた」、また「土木事務所の職員が園児に積極的に子どもたちにかかわっている姿に戸惑った」と記入している。それについて担当者が詳しく聞くと、「自分よりも土木事務所の職員が子どもに積極的にかかわるとは意外だった。それに比べて、自分は動けなかった。でも楽しかった。」と答え、言葉に詰まり、涙が込み上げていた。

一五

<Cは自分自身の課題に直面し、悔しさや虚しさのようなものを感じていたようであった。>

【担当者は、Cが自分自身の課題に直面したことは、非常に重要なことで、

ここから始まるのではないか、この体験を糧に頑張ってもらいたいと助言した。】

D（女）は、アンケート用紙に、「自分は前に出るタイプではなく、バックアップが向いている」と気づき、「リーダーが頑張り、私には何ができるのか」という記述があった。担当者がこれについて聞き取りをすると、Dは「以前から自分が前に出るタイプではないと思っていたが今回の活動で明確になった」と話した。また、Dは傍観者の的で積極的にかかわっていないこと、リーダー任せであったことを語った。

【担当者は、Dに対して、バックアップに向いている自分自身の特性を今後に生かしていくこと、また誰か一人が責任者ではなく、一人ひとりが責任者であることを伝えた。】

E（女・サブリーダー）は、アンケート用紙に、「人任せなところがある」という自分に気づき、「子どもたちとどう接してよいか」という戸惑いや悩みのようなものを、また「話し合いの大切さ」を回答していた。筆者がこれについて質問すると、Eは「私はサブリーダーであったので、もっとリーダーのGくんをサポートしなければならなかったが何もできなかった。この活動はGくんがいたから成功した……」と話の途中から涙がこみ上げ、言葉にならなくなった。

<Eは込み上げる涙が落ち着くと、穏やかな表情をしていた。>

【担当者は、Eによく頑張ったこと、自分自身に直面し、少し気持ちの上で痛みを感じているのではないかと伝えた。この体験を糧に、より以上に物事に積極的になるよう助言した。】

F（男・サブリーダー）は、アンケート用紙に、「本当に子どもたちとベンチをきれいにできるのか」という不安を持っていたようだ。また、「もっと話し合いをした方が良かった」と回答していた。このことについて担当者は「今、終えてみてどうか」と質問すると、Fは「子どもが思っていた以上によく頑張った。子どもはペンキや筆を手にとると生き生きしていた。土木事務所の職員や園の保育士も協力してくれたし、学生同士も協力し合えて、思っていたよりうまくできた」と答えた。

【担当者は、Fがサブリーダーとしてよく頑張ったことを評価し、「あなたが感じているように外部機関との協働・連携、つまり子どもも大人も一緒に協力することの大切さをこれからも大事にして欲しい」と伝えた。】

G（男・リーダー）は、アンケート用紙の「気づき・発見」の欄には「皆を引っ張っていくタイプではない」「サブリーダーが向いている」「子どもたちに話している自分が好き」とあった。また、「土木事務所の担当者と根本的に合わない」と葛藤していることを、また「社会人の暖かさ、厳しさを体感した」ことを記述している。このことについて担当者は「振り返って見てどうか」と質問してみるとGは「今でもリーダーは向いていないと思っている」「子どもはやっぱり好きだな」「土木事務所の方についてはいろんな人がいる」と答えた。

<Gが土木事務所の担当者と合わないといっていることについて、リーダー、サブリーダーが3回、土木事務所に事前打ち合わせに行っている。そのたびごとに土木の担当者が学生たちに厳しい指導をされたようである。その中でGが葛藤したことである。>

【担当者は、「他の学生は、Gのことをリーダーとして認めているので、

それをフィードバックとして受け入れてみる必要があるのではないか。リーダーという一面はもしかしたら、自分が知らない自分であり、自分が気づいていない一面かもしれないと伝えた。

また、土木事務所の職員との葛藤について、筆者は「あなたが感じているように世の中にはいろんな人がいて、共に動いていかななくてはならないことがある。就職すれば必ずと言っていいほど合う人、合わない人が出てくる。辛抱することが大切であること、良き相談相手を持つこと。」を助言した。最後に筆者はリーダーとしてよく頑張ったことを評価し、「あなたが社会に出るための具体的なイメージがつかめたとアンケートで記述しているように、今回の活動において最も社会勉強をしたのではないかと伝えた。】

VIII 考 察

今回のボランティア実践活動を通じて、地域社会の人々と共に協働連携して社会貢献する体験と同時に実践活動の中で自分自身の課題や人間関係に直面するという内面的な体験をしている。

ここでは、学生のボランティア実践教育の在り方として、「社会貢献」と「学生の内的体験」の2つの視点から考察を深めたい。

1. 社会貢献する体験について

学生は、事後アンケートの記述やゼミのフォローアップ時の発表内容から今回の環境美化ボランティア活動において、保育園、土木事務所などの専門性について専門家の人々と実際にかかわって実感として学び、また協働・連携して社会貢献するメカニズムを学んだと考えられる。

図5は協働・連携による社会貢献のメカニズムを図に表したものである。

学生は、事後アンケートの「外部機関との連携」の項目の回答に「それぞれの専門性があるからこそそのボランティア活動だった」と記述している学

生も見られ、外部機関の専門性を実感している様子が窺われる。

また、実際に行動に移していく中で「話し合いの大切さ」、「もっと話し合いをした方が良かった」と記述している学生もあり、コミュニケーション

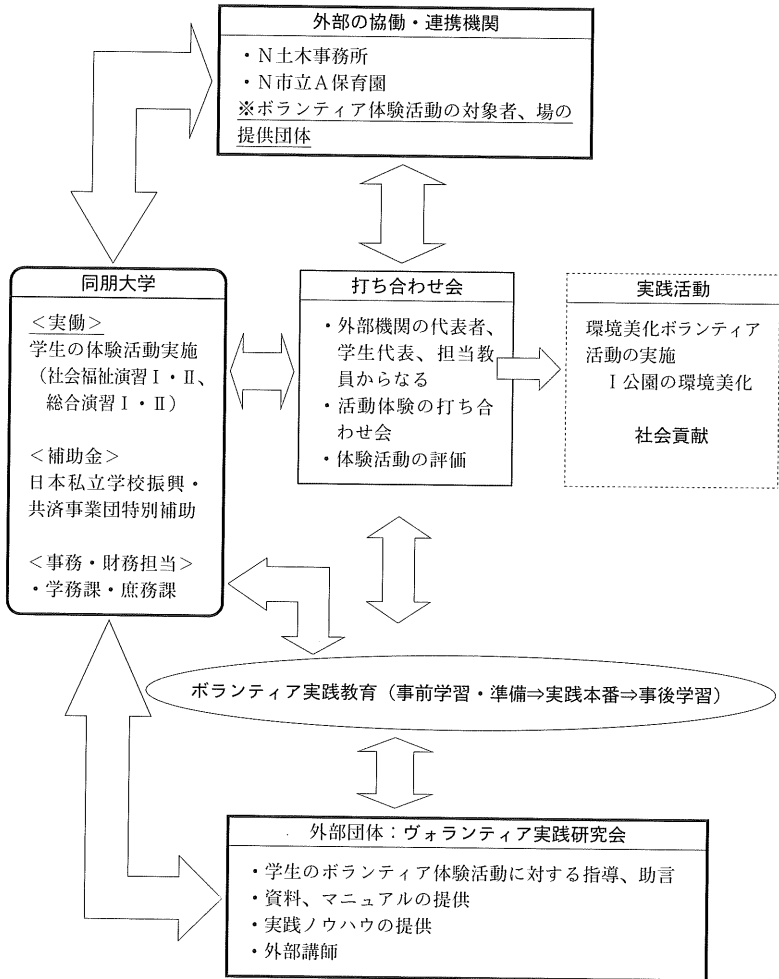


図5 社会貢献への協働・連携の概念図

ンの重要性を学んだと思われる。

さらには、「社会人の暖かさ、厳しさ」、「社会に出るための具体的なイメージがつかめた」と記述している学生も見られ、学生が福祉職として現場に出た際に社会資源や地域の人々と連携して地域社会を構築していく上での体験的な学びができたのではないかと考えられる。大学内の教室における講義では得られない、実践力や精神力を体得してうえで実践教育の意義がここにあるものと思われる。

2. 学生の内的体験について

1) 自分自身に直面すること

私たちが本当に自分自身の歩みを獲得するためには、自分自身に目覚め、立って生きることが重要である。私たちの思いもよらなかった自分自身に気づき、うなづくことで、自分自身の歩みが始まると考えられる。「わたし自身」に眼を向け、「わたし自身」の抱える問題が明らかになったとき、はじめて気づき、うなづくことができると考える。

A(女)、B(女)、H(男)の3名は、環境美化ボランティア活動において、戸惑い、迷い、悩み、疑問などの葛藤への意識が薄く、アンケート用紙も無記入などが多かった。さらにフォローアップの演習時の発言内容も乏しかった。彼らはまだ自分自身に直面できる状態ではなかったと考えられる。彼らはまだ自分自身に眼を向けることができない状態、自分自身に気づき、うなづける状態になかったと考える。しかし、これを否定的に捉えるのではなく、彼らの出発点がここであり、筆者は彼らが卒業して社会へ出るまでの間に、彼らが自分自身と出会えるようにともに生きることが大切であると考えられる。

一方、C(女)は「自分自身がネガティブな思考である」、D(女)は「前に出るタイプではなく、バックアップが向いている」、E(女)は「人任せにして来たところがある」、G(男)は「土木事務所の人と合わない」など、自分自身に眼を向け、自分自身の気づきや戸惑い、迷い、悩みなど

葛藤を体験している。C（女）、E（女）はフォローアップ時に自分自身の課題に気づき直面したためか、あるいは心に痛みを感じたのであろうか涙が込み上げていた。C、Eは心に痛みが生じたようであるが、このような自分自身を超えていく内的体験が重要であって、こうしたことは彼らが社会へ出ていってからも生じることである。自分自身の課題をしっかりと認識することが実践力と精神力を兼ね備えた人材へと昇華させていくものと考えられる。

また、D（女）は自分自身の傾向性を明確にできたようである。以前から漠然としていた自分自身が、このボランティア体験によって再認識できた。Dにとってこの体験は、自分自身と出会えた喜びでもあり、これが自信となることであろう。

彼らのこの体験は、これから社会に出て行く彼らが自分自身の歩みを始めた証ではないかと考える。筆者は一步踏み始めた彼らとともに、卒業時まで彼らが「生きる力」を拓げていけるように時には寄り添い、時には見守っていくことが必要であると考ええる。

2) 人間関係に直面するという事

G（男）の事例を引き合いに出して考えてみたい。Gはリーダーであった。土木事務所の職員と打ち合わせをする中で、Fは「土木事務所の職員と合わない」と感じたようである。土木事務所の担当者は学生に厳しく指導してくれたようである。こうした体験は社会に出ても起こり得ることで、厳しい上司と部下の関係のようなものである。これを学生がどう見るかが重要になってくる。人間関係が合わないから背を向けるのではなく、社会に出ると気の合わないものと共に仕事をしていかななくてはならない。辛抱と寛容な心が必要となってくる。筆者は何も気合わないものを好きになれと言っているわけではない。仏教哲学の用語に四苦八苦⁽²⁾という言葉がある。その中に怨憎会苦という言葉がある。これはまさに気の合わないものと共にいる苦しみをさす言葉である。人生とは、気の合わないものと共に

いる苦しみを体験しながら生きていくことであることを学生に伝えていく必要がある。そうすることによって、社会の中で生き抜いていく力を兼ね備えた人材を育成することにつながっていくと考えられる。

離職する人に、人間関係で躓いたという声をよく耳にする。学生が社会に出て人間関係に躓くと想定して、気の合わない者と共にいる苦しみを直面させる必要がある。Fは非常に葛藤した体験であったであろう。しかし、学生が直面することによって、打たれ強い、息の長い人材となって育っていくと考えられる。

3) 「共に生きる」ということ

Fは「本当に子どもたちがベンチをきれいにできるのか」という不安を持っていた。

しかし、フォローアップ時に、Fは「子どももがんばって、土木事務所の職員、保育士、学生と協力してできた」と話している。Fは自分自身が不安を抱いていたことに改めて気づいたのである。

Fは、学生として、子どもがよい体験ができるように、ボランティアする側で、子どもはボランティアされる側という見方をしていたのではないかと思われる。これは当然の見方であるが、だからこそ、子どもたちに不安を抱いたのである。Fは気持ちの中で子どもたちを信頼できなかったのであろうし、自分自身も信頼できなかったのであろう。

この視点をもう少し広げてみると、土木事務所は公園という場を提供する側で、子ども・保育士・学生は提供される側である。

この活動の場にいたすべての人が「する側」、「される側」という関係から解きはなれたからこそ「共に」という関係が生れ、活動自体がうまくいったのではないかと考えられる。子ども、保育士、土木事務所職員、学生と役割はそれぞれ別々であるが、「共に」相手がいる立つわけであるから、だれが優位に立つということではない。このような体験は、ボランティア体験の場だけではなく、社会福祉の現場に出た際にも起こり得ることで、

Fは自分を信頼し、相手を信頼すること、協力することを学んだのであろう。

Fは意識していなかったであろうが、無意識に「共に」ということを感じていたと考える。

おわりに

本論文は、大学を拠点とした近隣の協働・連携機関と共に実践した環境美化ボランティア活動の実践事例を取りあげ、学生のボランティア実践教育の在り方について考察した。

実践事例は、実際の行動学に基づいて実施された。学生は実践活動を通して、社会貢献のメカニズムを学ぶと同時に学生自身の内的体験からの学びがあることを述べた。学生は、実践活動において、そこで生じるさまざまな人間関係で葛藤を体験している。本論文では、学生が葛藤と向き合い、受け容れ、昇華していくことによって実践力と精神力を兼ね備えた人材養成につながっていくことを言及した。

今後、筆者は、実際の行動学の基づいたボランティア実践教育のアプローチの実践を積み重ねていく中で、一般化していくことが課題であると考えている。

※本実践研究は、日本私立学校振興・共済事業団特別補助（平成20年度教育・学習方法等改善支援）によって実施された。

注

- 107
- (1) ヴォランティア実践研究会：筆者が所属しているインフォーマルな研究会である。構成メンバーはヴォランティア実践の専門家、会社役員、心理カウンセラー、作業療法士、社会福祉士、介護福祉士などで、自律性・独立性を重んじ、ヴォランティア実践を通じて自己探求やボランティア実践研究の在り方を実践的に

研究している。

- (2) 四苦八苦：しく - はっく【四苦八苦】 しくはっく【四苦八苦】
- 1 仏語。人間のあらゆる苦しみの称。四苦は生活（生-シヨウ）、老（ロウ）苦、病（ビョウ）苦、死（シ）苦。
- 八苦は四苦に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦の四つを加えたもの。
- 愛別離苦：愛おしいもの、愛するものと別れる苦しみ。
- 怨憎会苦：気が合わないもの、気持ちのそぐわないものや事と共にいる又は遭遇する苦しみ。
- 求不得苦：求めても得られないものや事がある苦しみ（不老不死を求めても決して得られない）。
- 五蘊盛苦：五感の苦しみ。五感から得られた経験や情報を基に考えたり、悩んだりする苦しみ。観念や概念という矛盾を基本にして、限定的な思考で行動する苦しみ。
- 小学館『国語大辞典』、岩波書店『広辞苑』より。

引用・参考文献

- 大阪ボランティア協会編『ボランティア 参加する福祉』ミネルヴァ書房、1981年、
- 社会福祉法人愛知県社会福祉協議会ボランティアセンター『みんなのボランティア』資料、2003年
- 中嶋充洋『ボランティア論』中央法規、1992年。
- 藤野信行『ボランティアのための福祉心理学』NHK出版、2003年
- 目黒心理教育相談室・情緒教育部『ヴォランティアリングー自己の生き方の反映として一』資料、1998年、1-6頁
- 目黒達哉・竹田倫代『福祉教育の論理性について』愛知新城大谷大研究紀要第3号、2006、p51 - p67